5. 宮城県の湯治宿の現況と将来

東北大学長町分院　鈴　木　仁　一

(昭和48年8月30日受理)

Present Situation and Expected Future of Japanese Style Spa-Inn in Miyagi Prefecture

Jinichi SUZUKI
Nagamachi Branch Hospital of Tohoku University School of Medicine

緒　　言

温泉が各種の慢性疾患の疾状軽減に有効であることは古くから知られていることであるが，その治癒機転については，著者は従来までの著者等の温泉研究の成果から類推して，温泉の微量成分の生体に対する薬理作用よりも，長期間の入浴による自律神経内分泌系の変調作用，正常化作用が主体であると考えている．このような考察は別として，わが国では昔から庶民の智恵として慢性疾患の治療に多数の湯治場が利用されて来ているが，医学的にみても極めて有用なことと考えられる．しかし，そのような湯治場は次第に減少しつつあるのも事実であり，憂慮すべきことであろう．未だ，将来性のある湯治場をいたずらに観光資源開発という美名のもとに観楽地化さすべきものではない．このよな考え方にもとずき，われわれは宮城県内の湯治温泉を実態調査し，将来性のある湯治場と衰微しかけている湯治場の差異を考察してみることにした．

調査対象及び方法

調査した湯治宿は14軒で，宮城県内13軒，岩手県内1軒である．岩手の1軒とは，著者らが1964年以来毎年夏季に温泉療養相談所を開設している須川温泉である．宮城県内では蔵王山地区の小原，鎌先，青根，峨々，大東山地区の秋保，船形山地区の作並，定義，栗駒山地区の川渡，中山平，鬼首，温湯，湯浜の各温泉で，東北地方の脊梁である那須火山帯に所属する．いずれも温泉法に定められた規定を有する白噴泉であるが，これら温泉地の中から，宿泊者の半数以上が自炊生活をする湯治客であり，歴史的にみても古来から有名な湯治宿をそれぞれ一軒宛（鬼首だけは2軒）選択した．調査は著者が昭和47年9月から12月までの間に直接宿泊し，経営者及び浴客との面接により実施した．調査項目は，年間の湯治客数，平均滞在日数，湯治客の年令及び職業構成，利用者数の季節的変動，泉質，泉温，分析表による適応症と実際に来湯する湯治客の疾患との相違，交通事情，遊興的環境の有無，経営者の湯治についての考え方の10項目で宮城県衛生部の絶大な援助により行なうことができた．

調　査　結　果

宮城県内の13軒の年間延湯治客数は約86,200名であるが，今回県内全湯治宿数の約5分の

1しか実施していないので，総湯治客延人数は5倍の431,000名と推定できる．これは昭和46年の宮城県内温泉利用者総延数1,736,553名の約40%にあたる．このことは東北地方では，湯治が今でも盛んに行われていることをしめすものである．しかしながら，各湯治宿による較差は著しく，極端なところでは年間湯治者実数16名という湯浜のようなところと，延べ25,889名という峨々温泉のような差がみられ，将来，衰微するであろう温泉と，発展が予測される温泉が明らかに区別できた．利用者数が少ない温泉の浴客の年令構成は60才以上の高令者で，農業，漁業を家職とする家の隠居者が大部分で，湯治目的は，主として老人の気保養であり，神経痛などを伴っている患者も多かった．従って，季節的にも農閑期，漁閑期に集中していたが，温湯(ヌルユ)では，農閑期になると労働力保有者が都会に出稼に出てゆき老人が留守を守るために湯治にも来れなくなり，農閑期の湯治客数も減少している現象がみられた．これに反し発展が予想される温泉では青壮年者の浴客も少なくなく，職業も必ずしも第一次産業だけでなく，一般のサラリーマンが増加している．しかも，特殊な泉浴効能をもつといわれている温泉では，分析表記載の適応症とは一致しない疾患をもつ湯治客が集っていた．すなわち，含食塩芒硝泉である鎌先には，創傷，外傷後遺症，単純泉の青根では神経症，含石膏食塩泉の峨々では慢性胃腸疾患，単純泉の定義では内因性精神病，硫化水素泉の川渡では脳血管障害後遺症，鬼首の含塩土類泉である神滝には神経症，明ばん緑ばん泉の須川には慢性胃腸病と自律神経失調症などである．これは古来からの伝説的効果によると思われるが，効果があればこそ湯治客が集るものであろう．なお，最近の特色としては，交通事故後の神経症と，いわゆる心身症が来湯するようになっている点であり，時代の反映とみられる．これらの温泉は，いずれも閑静な土地柄であって，遊興環境をもっていないため，大都会の物理的精神的騒音から脱出するという意味もあろう．しかしながら交通事情が極端に悪い所は少なく．むしろ舗装道が通じている湯治場の方が利用率が高い．最も注意すべき共通点は，温泉宿の経営者が温泉治療の本質を理解していて，湯治客を優遇していることである．なかには，疾病治療の目的以外の宿泊を拒否する定義のような湯治宿もある程である．そのような経営者は，みな，自分の保有する温泉の効果を信じてはいるが，近代医学のよい理解者であり，医療機関との提携を強く望んでいた．

結　論

最近，有名温泉地はますます歓楽的要素がつよくなり，温泉地の住民もそれを期待する傾向にあるため，温泉本来の目的から逸脱した悲しむべき現象として，本学会員の間でなげかれている．昔からの湯治場も少なくなり，老人の気保養の地として維持されているにすぎないとも言われる．しかしながら，特色のある湯治場は今もなお盛んに利用されており，近代的病院における薬物治療に失望した患者が温泉治療に少なからぬ期待をもって集ってきている．そのような将来性のある湯治場の環境条件をまとめると次の如くなる．

(1) 経営者が湯治者を優遇し，温泉治療に積極的である．
(2) 分析効能と必ずしも一致しない昔から固有の適応症をもっている．
(3) 遊興的環境をもっていない．
(4) 交通が比較的便利である．

このような条件を満している湯治場には，医療機関は積極的に協力し，漸次減少しつつある真の保養地の保護育成にあたるべきであろう．